

ディクテーションの誤答分析に基づく
英語の聞き取り指導

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

矢野 淳

ディクテーションの誤答分析に基づく英語の聞き取り指導

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科
矢野 淳

1. はじめに

文部省（1995）によると、中学校においては、英語を書くことの言語活動を行わせるための指導事項の一つに「語句や文を聞いて正しく書き取ること」を挙げ、高等学校の英語科の「総合英語」及び「英語理解」では「書き取り」が内容として含まれている。中学校・高等学校の英語の授業で、リスニング指導の一環として、ディクテーションが広く取り入れられていると思われる。

垣田（1981）によると、ディクテーションでは、「正書法、句読法、文法の知識」が必要とされ、「言語能力と高い相関を示す」ことがディクテーション賛成論者の主張である。

渡辺（1996）は、ディクテーションに関して、正確に聞き取れない原因に次の5つを挙げている。

- (1) 注意して聞いていない
- (2) 綴りがわからない
- (3) 同音異義語を書いている
- (4) 速くて聞き取れない
- (5) 音声変化に不慣れなために聞き取れない

ディクテーションの誤答に接する経験から、英語教育者から直感的に学習者の聞き取りの弱点が挙げられていることは多いが、誤答の実証データとともに学習者の聞き取りにおける指導上の留意点を研究したものはきわめて少ない。

本研究では、高校生英語学習者に対して行ったディクテーション・テストの誤答分析から、英語の聞き取りに関する指導上の留意点を考える。

2. 調査方法

2. 1. 調査目的

高校生英語学習者に対して、ディクテーション・テストを行い、その誤答を分析し、よりの確な聞き取り指導上の留意点を探る。

2. 2. 被験者

1997年度筑波大学附属駒場高等学校 1 年生の男子160名。

2. 3. 素材

本年度高校 1 年生オーラル・コミュニケーション B の授業で使用している教科書の第 6 課までに扱った本文中の 5 つの短い英文を素材とした。

- (1) Kyoto is a beautiful ancient city.
- (2) That's a bit cool for this time of the summer, isn't it?
- (3) What time should I pick you up?
- (4) What's the purpose of your visit?
- (5) It was just like a nightmare.

なお各文において、下線部の語句等、句読点、疑問符はあらかじめ解答欄に印刷しておいた。(1) の Kyoto は日本語がローマ字で表記されたものであり、(2) の That's 及び isn't it は他の問題に比べて極端に長い英文とならないためである。

2. 4. 調査方法

テープにより、各英文はナチュラル・スピードで約 7 秒間のポーズをはさんで 3 回ずつ聞かせ、書き取らせた。各文の配点を 3 点とし、合計 15 点満点とした。採点基準は、綴りの間違いを 1 点原点とし、間違いの程度に応じて 0, 1, 2, 3 点と採点した。

3. 結果と考察

3. 0. 採点結果

調査で用いられたディクテーション・テストの平均点は 15 点満点で 5.76 点、標準偏差は 3.31 であった。以下各文の誤答を分析していく。

3. 1. Kyoto is a beautiful ancient city.

予想通り形容詞 ancient のつづり間違いが多かった。他の実在する語にとり違えられたもので最も多かったのは Asian で 4 名であった。(大文字・小文字の区別なし) またこの形容詞を each of と 2 語に聞き取った者が 5 名存在した。

4. 2. That's a bit cool for this time of the summer, isn't it?

最も特筆すべきは、[b] を [v] と間違えて聞き取った生徒が多いことである。これが原因と推測される誤答はvery (11名) が挙げられる。また [b] 音は聞き取ったが、bigとした者5名、beとした者51名 (31.9%) である。beに関してはさらに、①語尾に日本語のように母音が付加されない子音 [t] が聞き取れなかった②音の長さではなく音の質の違いを聞き分けられなかった③a bitのフレーズがわからなかった、あるいは推測できなかった、の大きく3要素が関係している可能性があり、①②については生徒たちの母語が影響していると思われる。

beが動詞の原形であり、正確な文法を考慮したためか、直前の語句をwillとした者14名、wouldが1名、going toとした者が2名、able toとした者が1名、直前に不定詞のtoのみ書いた者が4名、直前にfine toと書いた者2名である。

3. 3. What time should I pick you up?

動詞pickのかわりに、語尾の子音が同じで、生徒が接する頻度がより高いと思われるtakeかその変化形を書いた者が70名 (43.8%) 存在した。またwakeかその変化形を書いた者が4名いた。

目的語youを聞き取れなかった生徒のうちの25名は、-ingを付加している。これは動詞とupの間に何らかの音節を認識したものと思われる。

should Iの部分を、July (またはjuly) と記している者が3名いたことが興味深い。小栗 (1995) によると、shouldの [ʃ] [d] とJulyの [dʒ] [l] はすべて歯茎音に分類されており、2つの共通する母音が含まれるためこのように聞こえたと推測される。

問題文中には含まれる語が1語もなく、主語も異なっているが、What timeの後にwould you like (to) と続いている者が15名いた。相手の意向をたずねている英文であることは理解し、学習上より多くの回数接していると思われるwould you like (to) が、意味のまとまりとして解答時に生徒の頭に浮かんだと推測される。

文末のupの代わりに、offとした者7名、outとした者が2名おり、その動詞はすべてtakeかその変化形であった。pick you upの部分を正解している者は少なく、46名 (28.8%) であった。

3. 4. What's the purpose of your visit?

最も特筆すべきは、3.2で見られた現象の逆と思われる [v] を [b] と間違えて聞き取った生徒が多いことである。名詞visitに対する誤答として最大数の生徒が聞き違えたのはbusyで23名 (14.4%) いた。つづり間違えと推測されるbussyを書いている者、また品詞としてここでは名詞であるべきと考えbusinessと書いたと推測される者が2名ずつ見られた。後日このテストのフィード・バックを授業で行い、visitに対する誤答として何が一番多かったか発問したところ、複数の生徒がbusyではないかと答えたことが興味深かった。visitの最初の [v] を [b] に聞き取ったと考えられる誤答を列挙する。

Betty, burrey, btic, bisit, better, ability

What'sに対して、Whatの後に何らかの動詞を書いていない者は17名であった。NISHIKAWA (1994) は、高校生を対象に行ったディクテーション・テストにおいて聞き落とされた動詞が聞き落とされた名詞に比べて約1.6倍多かったことを報告しており、動詞を聞き落とす傾向は認められると今回の研究でも推測される。

3. 5. It was just like a nightmare.

白紙6名, 1・2語しか書き取っていない白紙に近い答案2名を除いて、動詞がまったく書かれていない英文を書いている生徒が10名であった。

-mareと間違えたのか、実在する単語が書かれた中で最も人数が多かったのはnowで17名であった。ただし不正解ながらnowにあわせて動詞を現在形にしている者は、17名中3名のみである。-mareもつづり間違いも多く、-mereとした者が4名、-mearとした者が1名である。発音を聞き取った単語を、フォニックスの知識を用いて綴りを書く、確認することも方略の一つとしてとらえたい。また、正しく聞き取った子音 [m] からmanとしたと推測される者が4名いた。

4. 聞き取り指導上の課題

今回の調査結果に基づき、英語の聞き取り指導上、留意すべき点を以下にまとめる。

4. 1. 英語の母音の特徴

母音の長さによって単語の意味が変わってしまう日本語に対して、長さではなく質の違いにより単語を区別する英語の特徴を強調する必要があると思われる。Griesy・矢ノ下 (1988) は、日本語の「痛い」と「言いたい」を例に挙げ、日本語では「い」と「いい」という音の長さのちがひによって、意味が全く変わってくることを学習者に解説している。英語において母音の長短は、無声音系の母音の前に比べ、有声音系の母音の後では長く発音されることがGriesy・矢ノ下 (1988)、文部省 (1992) に指摘されている。

小栗 (1995) は、英語の母音 [i:] の解説で [i] と比較すると単に長さだけでなく普通には母音の質も変化することを挙げている。牧野 (1990) は、Lado, Hill, Brown, Gietの4人の言語学者全員が、発音面で日本人は [i:] と [i] の区別の問題があることを記しており、聞き取りにおいて今回の調査で見られた結果と一致している。

4. 2. 日本語のカタカナ表記

外来語として同じカタカナで表記せざるをえないことが、聞き取りに影響を及ぼしていると思われる。今回の調査で、カタカナでは両音ともバ行の音で表記されることの多い、[b] を [v] に、またはその逆に聞き取ったと推測される誤答が多く見られた。

牧野（1990）は、英語の子音の中でも、カタカナで同じバ行で受け取られる [b] - [v] の区別、同じサ行で受け取られる [s] - [θ] の区別、同じザ行で受け取られる [z] - [ð] の区別、同じラ行で受け取られる [l] - [r] の区別の困難さを指摘し、 wool, year の [w] [j] が母音に埋没してしまう点に注意を促している。

また大多数の単語が母音で終わる日本語に比べて、英語の単語には子音で終わるものが多い。この違いの認識が不十分なためか英単語の語尾の子音を聞き落とし、その結果別の単語に聞き取ってしまったケースが 3.2.及び 3.4.で見られた。例えば restaurant がカタカナで「レストラン」と表記されることから、語尾の子音を聞き落としてしまう現象を筆者は「レストラン発音」と呼ぶ。また、母音で終わる日本語の特徴をあてはめて発音してしまい、すべての子音に母音を付加してしまう現象を「マクドナルド発音」と呼ぶ。本校高校 1 年生のオーラル・コミュニケーション B の授業において、この「マクドナルド発音」を矯正すべく Assistant Language Teacher から個別に練習させられる生徒は多い。

5. 結論

久保野（1997）は、大学 1 年生に対するディクテーション・テストに際し、次の 2 点を指示したことを報告している。①ディクテーションとは、聴力検査ではない。ある意味では、聞こえなかった音を再構築する作業である。②再構築作業の際には、語い力・文法力等を総動員する必要がある。ここで挙げられた 2 点が学習者に意識され、総合的な英語力を用いて正解に近づける作業をするため、垣田（1981）の指摘する言語能力と高い相関を示すことがディクテーション賛成論者によって指示されているのであろう。今回の研究で見られた、誤答につながると考えられる原因を学習者にフィード・バックし、さらなる練習を重ね、学習者が総合的な英語力を高めていくことができれば、本研究は教育的意義があると考えられる。

参考文献

- 石井敏他, ORAL COMMUNICATION COURSE B LISTEN, 1997, 桐原書店
垣田直巳編, 英語科重要用語300の基礎知識, 1981, 明治図書
久保野雅史, 「SUNSHINEはこう使おう」, 楽しい英語授業 4 月号, 1997, 明治図書
GRIESY, Paul V・矢ノ下良子, SOUND SPELLING HARMONY Guidebook, 1988, SSH英語教育研究会
小泉敬三, 英語音声学, 1995, 篠崎書林
NISHIKAWA, Fumihito, "A WEAK POINT FOR JAPANESE EFL LEARNERS: IS IT A NOUN OR A VERB?" LEO Vol. 23, 1994, Tokyo Gakugei University Graduate School Eigo Kenkyu-kai
牧野勤, 英語の発音, 1990, 東京書籍

文部省，英語を聞くこと及び話すことの指導，1992，学校図書

文部省，高等学校学習指導要領解説，1995，教育出版

渡辺浩行著，英語教師の四十八手 リスニングの指導，1996，研究社出版